

良寛と子供

越後國上 原田 勘平

○
私は所謂良寛の研究者ではない。私は私の家其ものが良寛と多大の關係を有つて居る上から、良寛と云へば非常のなつかし味を覚え、非常に敬虔の念が湧き出ることを禁じ得ないのである。私の曾祖父正貞及び玄祖父鶴齋の二人が良寛の知遇を受け、詩歌簡墨の應酬に、時には五合菴を訪づれたり、禪師がお越しになつたりした當時を追懷する毎に、何となしに、ほがらかな温か味を感せずには居られぬのである。私は良寛の遺物や遺墨に接する時、何時の間にかセチ辛い現代の事業も生活も打ち忘れて只管無可有の郷に逍遙するの思ひがするのである。良寛の人格の尊い所、良寛の藝術の並々ならざる所も亦こゝに在るのであるまい

かと常に思つて居るのである。今年の夏、私が『越佐教育』に『良寛と教育者』と題する短篇を書いたことが縁となつて、はからず女子高等師範の倉橋教授がわざわざお訪ねになり、『良寛と子供』のこゝとを何か書いて見よとのお勧めがあつた。私も日頃そんな事を考へて居たので、今回まとめて見る氣になつたのである。

近來良寛に關する論説や著述がいろいろ出るやうになつたことは眞に喜ばしい事であるが中には事實の詮索にのみ没頭して、眞の良寛を味ふことを忘れて居るものもあり、又其の反對に他人の著書を基礎にして評論したりするので事實を誤つて居る人も往々あるやうである。私は成るべく判然せる事實は事實として尊重し、其の上に私の味ふ

て居ることを書いて見たいと思ふ。

言ふまでもなく、良寛の傳記は大まかに三つに分けることが出来る。彼が僧侶になるまでの少年時代が一つ。僧侶になつて、玉島へ行き、それから行脚して歸國するまでの雲水時代が一つ。五合菴や乙子湖畔の在任換言すれば國上時代から晩年までが一つ。

私は本稿を進める順序として、以上三つの時代から良寛と子供の關係を見て行きたいと思ふのである。固より良寛にはまとまつた遺稿すらないのであるから、私はどうしても是まで諸家の集めた詩歌と充分信を置くに足る逸話とを基礎にし考へて見るより外に方法がないのである。随つて書かうとする事柄も別に新らしい發見でも何でもないたい良寛と子供のことをまとめたいといふに過ぎないのである。

○ 良寛は子供の折 其の生地出雲崎から五里はか

り離れた地藏堂町の狭川といふ先生の塾へ句讀を習ひにやられた。(この狭川先生の事は今盛んに調べて居るのであるが未だ判然しないのである)彼が晩年狭川先生を追懷した詩は幾つもあるから、並ならぬお世話になつたことであらふ。當時同じ塾の友だちであつた地藏の大庄屋の富取之則を吊ふた詩に

人生百年内、 汎若中流船、 有緣非無因

誰置心其邊、 昔與二三子、 翺翔狹河間云々

とある。狹河とは今の西川のこと、今でも小学校の兒童が堤防に遊んで居るのである。殊に夏などには水を浴びる子供が大勢見られるのである。

良寛も他の同輩と随分驅け廻つたものらしい。そこで或る著者は

松の尾の松の間を思ふとちあるきしことは今も
忘れず

といふ歌を、狹川塾時代に友達と松野尾の松林へ遊びに行つた追懷の歌であると斷定して居るので

ある。けれども私は、松野尾といふ所は松林があるといふ外に何の風趣もない所であるのに態々遊びに行つたとは思はれない。又地藏堂から松野尾までは六里ばかりもあるから、そんなことを讀んだものだとは思はれない。之は松野尾から一里ばかり離れた所の赤塚に中原元讓といふ良寛の知己が居たのだから元讓と一緒に歩いた事を餘程晩年に讀んだのであるまいかと思つて居る。

兎に角狭川先生の下に居た頃は飛び廻つた方であつたかも知れないが、私は他の事實から推論して、良寛は寧ろ反對に子供の時から女性的な浪漫的な一種の天才的なタイプな人でなかつたかと思ふ。それは次の逸話に依つてゝある。

良寛が未だ八九歳の頃であつた。家人に叱られると、よく上目で叱つた人の顔を睨む癖があつた。或時夫れを氣にして彼の父は「親の顔を睨む奴は鯨になるぞ」と言つた。夫れをぢつと聞いて居た良寛はやがてぶいと家を出たがいつま

でたつても歸つて來なかつた。家人はひどく心配して方々捜し廻つたがなかく見つからなかつた。と、思ひがけない海濱の岩の上に彼はただ一人しよんぼり立つて、じつと海を眺めて居た。人々は且つ驚き且つ喜んで「こんな所で何ををしてゐるのだ」と聲をかけた。良寛は人々の顔を見ながら「おれはまだ鯨になつて居らんかね」と訊ねた。

何といふ浪漫的な逸話であらう。「おれはまだ鯨になつて居らんかね」何といふ天才的な言葉であらう。又斯んな話もある。

良寛は幼少から讀書を好んだ、そして殆んど寢食を忘れた。両親も身體を悪くするといけなと思つて屢々警めたが甲斐がなかつた。或る夜庭園の燈籠の傍に人影が見えるので母は多分盗人だらうと早合點して薙刀を提げて近づいたら良寛は頻りに讀書して居た。

是等から考へて見ると、飛び廻るよりは寧ろ落

ち着いた勉強家であつたに違ひない、寧ろ女性的であつたとも言ひ得やう。

私は此の時代の良寛が如何に子供に興味を有つて居たか。どんな遊戯をなして居つたか等に就ての根據ある材料を有たないことを遺憾とする。併しながら、後年彼が手毬や、ハヂキや鬼などを盛んにやつた所から見ると、幼年時代から特に此の種の遊戯を好んで居たのではあるまいか、而してこんな女性的な遊戯を好んだといふことは感傷的な父の遺傳から來たのではあるまいかと思ふのである。

○
十八歳の時出雲崎の光照寺に髪を剃つた良寛は二十二歳に備中玉島の圓通寺國僊和尚の下に修學する身となつた。

從來圓通寺 幾回經冬春 門前千家色
乃不識一人 衣垢手自濯 食盡出城闔
曾讀高僧傳 僧可可清貧

とは玉島時代の良寛が告白である。玉島を中心としての時代は前後合して十八年と言はれて居るが、いかに孤獨不如意の忍苦と古聖の道に邁進せんとする努力精進の生活であつたかと思ひ知られるのである。

然らば此の頃の良寛は何等か子供に就ての交渉を有つて居たのであらうか。
相馬御風氏の許に左の如き報告が來て居る。

本日玉島町へ罷出圓通寺現住職石川戒全師より
聽取したるところ左記の通りにして實に臙臙たるものに御座候。中略

同師(良寛)の逸話として民間に残れるものは終始乞食坊主の風をなし兒守小供等と共に手毬歌など歌ひて遊戯せりといふこと。下略

それから、新潟市の故鈴木長藏氏其の他良寛崇拜の人々が先年圓通寺及び其の附近に就て禪師の逸話遺墨等を尋ねたが一つも得る所がなかつた。
只民間の傳説として右の子供と遊んだ話と、他に

一つの逸話が傳つて居るに過ぎなかつたといふことである。

之に依ると良寛の子好きは玉島時代に既に發揮されて居ることが明かである。良寛の歌に

百傳ふいかにしてまし草枕たびの庵に逢ひし子らはも

といふ一首がある。私は右の事實から玉島時代のことを思ひやつた歌でないかと思つて居る。

良寛は此の時代に、母にも父にも先立たれて居る。センチメンタルな彼は如何に悲み、喘ぎ、煩ふたであらう。

足ちねの母のかたみと朝夕に佐度が島根をうち見つるかな

水莖のあとも涙にかすみけりありし昔のことを

思へば

とは後年彼が述懐である。

我見講經人

雄辯如流水

五時與八教

説得太無比

自稱爲有識

諸人皆爲是

却問本來事 一箇不能使

佛學の修養に於て、人生觀照の態度に於て、確固たる根柢を固めつゝあつた彼にしても、當時の佛敎界の墮落を喝破せずには居られなかつた彼にしても、時には孤獨哀愁の涙に暮れずには居られなかつた。

山おろしいたくな吹きを墨染の衣かたしき旅ねせる夜は

理智想念の世界に於て廓然大悟の境地に達した彼も人間の子であつた。而かも世と戦ふべく餘りに弱き彼であつた。遣る瀬なき嘆きを懷いて放浪の旅をつゞけて居たのであつた。彼は此の時代に於て既に子供の友であつた。恐らくはこの時代が子供と遊んだ最初のものであつたのであらう。私は是れ實に彼が幾度か躓き、幾度か迷ひ、修養に修養を重ねて廣大なる佛陀の愛に目醒めた時代であつて、彼自らを救ふと共に自然と人間とに對する愛慕の情を禁ずることが出来なかつた爲めでは

なかつたかと想ふのである。

二十三年間の雲水生活から越後へ歸つて來た良寛は、寺泊近くの郷本の菴室に居たこともあり、出雲崎附近の中山の菴室に居たこともあり、寺泊の照明寺の密藏院に居たこともある。かくて五合菴に居を定めたのが文化元年で彼が四十八歳の年であると推定されて居る。勿論彼は死ぬまで五合菴に居たのではなくて六十一歳には五合菴近くの乙子神社の堂守の宅へ移り、七十歳から七十五歳の臨終まで、島崎の木村家の厄介になつたのである。私は大まかに此の時代を一つにして見て行く積りである。

五合菴に入つて以後の良寛の生活は、自由無疑で、何等の拘束も羈絆も受けない生活であつた。随つて食物が無くなれば托鉢に出かけ薪が無くなれば薪取りを爲し、讀書したければ讀書をなし、字を書いたり、詩や歌を作つたり、遊んだりして、

まるで人間と思はれない程圓融自在であつた。多くの逸話を遺したのも此時代である。幾多の藝術をのこしたのも此時代である。何の經文も説かない中に自ら人を感化した尊い人格の光を發揮したのも此の時代である。子供との交渉も彼が逸話や詩歌を通して最も鮮かに見らるゝのも此の時代である。

手毬をよめる

冬籠り、春去り來れば飯乞ふと、草の菴を立ち出でて、里にい行けは玉鉢の、道の巷に子供らが、今を春邊と手毬つく、ひふみよいむな汝かつけは、あは歌ひあかつけは、汝は歌ひ、つきて歌ひて霞立つ、長き春日を暮しつるかも

霞立つ長き春日に子供らと手毬つきつ、けふも暮しつ

子供らと手毬つきつ、此の里に遊ぶ春日は暮れすともよし

この宮の森の木下に子供らと手毬つきつ、暮し

ぬるかな

つきて見よひふみよいむなやこのとを十と納めて
またはしまるを

歌やよまむ手毬やつかむ野にや出む心一つを定
めかねつも

青陽二月初

物色稍新鮮

此時持鉢盂

得々遊市塵

兒童忽見我

欣然相將來

要我寺門前

携我步遅々

放盂白石上

掛囊綠樹枝

于此鬪百草

于此打毬子

我打渠且歌

我歌彼打之

打去又打來

不知時節移

行人願我嗤

由何其如斯

低頭不應伊

道得亦何故

要知箇中意

元來祇這是

袖裏繡毬直千金

謂言好手無等匹

箇中意旨若相問

『一二三四五六七』

日々日々又日々

間伴兒童送此身

袖裏毬子兩三個

無能飽醉太平春』

是等の詩歌を味ふて見ると、良寛は手毬が好き

であつた。そして自分自らも手毬を作つた（其の

一は私の家に傳へられて居る）私は良寛自身の作
になれる手毬歌がないものかといふ想像から別頂
に記載した五合菴を中心とした地方の手毬歌を集
めて見た。しかし其の中には多少釋教に關して居
るものもあるが良寛の作らしいものも見當らず、
又良寛の好みさうな筋のものも見えなかつた。況
んや訛り訛つて何の意味だか分らないものが多い
のであるから何の參考にならないかも知れない。
今日傳へられてゐる手毬歌が良寛の時代にもあつ
たものとすれば、良寛は何といふ意味なしに子供
と一緒に歌ひもし、つきもしたのであるまいかと
思ふ。

いさ子供山邊に行かむ菫見にあすさへ散らはい
かにせんとか

子供らと手携りて春の野に若菜をつめはたのし
くもあるか

この宮の森の木下に子供らと遊ぶ春日は暮れす

ともよし

梓弓春の山邊に子供らと摘みしかたこをたへは
如何あらむ

子供らよいさ出ていなむ彌彦の岡のすみれの花
にはひ見に

八幡の森の木下に子供らと遊ぶ夕日のくれまを
しかな

十字街頭乞食了 八幡宮邊正徘徊

兒童相見共相語 去年癡僧今又來』

也與兒童鬪百草 鬪去鬪來轉風流

日暮寥寥人歸後 一輪明月凌素秋』

頭髮蓬々耳卓朔 袖衣半破若雲烟

半醉半醒歸來道 兒童相擁後與前』

長閑な春日に子供等の仲間になつて莖や若菜を
摘んだり、草相撲を取らせたりして遊んだ。近所
の子供を連れて彌彦參詣もした、真面目の時であ
らうが一杯機嫌の時であらうが、途中に良寛を見
つけたら子供が彼方からも此方からも集つて來る

袖にすぎるものもあらう、頭にぶら下がるものも
あらう。良寛は「おい〜」「よし〜」で子供と
遊んでゐる。かくて五合菴に草鞋の紐を解く頃には
何時も明月が天に懸つて居た。解良榮重の手記
を見ると、

師神氣内に充ちて秀發す。其の形容神仙の如し。
長大にして清瘦、隆準にして鳳眼、溫良にして
嚴正、一點香火の氣なし。

と言つて居る。一寸見ても良寛は嚴めしさうな人
であつた。其の良寛がどうして斯んなに子供にモ
テたのであらう。要するに此の時代の良寛は、も
う佛の慈悲そのまゝを彼自らが體現して居た、め
ではなかつたらうか。

石階蒼々蘇花重 杉松風薰雨霽初

喚取兒童賒村酒 醉後拂却數行書

良寛はカラ黨の一人であつた。子供を頼んで酒
買にやつて一杯元氣で得意の字を書いて楽しんで
居た。

當時疱瘡が流行して子供が随分死亡した。良寛にとつては大切な遊び仲間を失つたわけである。

愛の權化とも言ふべき彼は非常に悲んだ。子供自身に就ても、又子供の親に就ても彼には他人のことと思はれなかつた。そして悲しみ嘆いた餘り、今日まで多くの弔歌を遺して居る。

人の國にありもやすらむ知らず、この國には疱瘡の神とて、七として一たび國めぐりすといふ、怪しものありて小兒ものをなやましける。此年は異年にも似す病めるものゝ生けるはなし、からうじて生けるは、鬼の面となる故、子もてるものは人の心地せず、日毎に野に送る櫃を數ふれは大指も指なひつべし。このころ其の病にて、をさなごを失ひし人の許より、彼是のあつらひとして自らのもそへて、もたせておこしたりける。もたせておこせたりし人なむ、をさなごの兄にてありける。さて末の残りしはいかにといへば、これも同じやまひにて、おとつひ空

しくなりたりといふを聞きて親のもとへよみてつかはしける

烟たに天津み空に消えはて、面影のみを形見ならまし

又かくも

なけりともかへらぬものを空せみは常なきものと思ほせよ君

さて其の法名はといへは信誓と答へはかくな

む

み佛の信誓ひの如あらはかりの浮世をなにねかふらむ

その夜は法華經を讀誦して有縁無縁の童に回向すとて

知る知らぬ誘引たまへみ佛の法の蓮の花の臺に

世の中の玉も黄金もなにかせむひとりある子に別れぬる身は

かしの實の只ひとり子に捨てられて我身はかり

になりしものを

いつまでかなに歎くらむなけゝともかへらぬもの
を心まとひに

子ともらを生まぬ前とは思ひとも思ふ心はしは
しなりけり

思ふそへあへすわか身のまかりなは死出の山路
にけたしあはむかも

なけゝともかひなきものをこりもせてまたも涙
のせき來るはなそ

子を思ひ思ふ心のまかりなはその子に何の罪を
おふせむ

子を思ひすへなきときはおのか身をつみてこら
せと猶やますけり

日くらしのなく夕暮は別れにし子のことのみを
思ひいてぬる

物思ひすへなきときは打出てゝふる野におふる
なつなをそつむ

もみち葉のすきにし子らかこともへはほりする

ものは世の中になし

唐衣たちも居てもすへそなきあまのかるもの思
みたれて

人の子の遊ふを見ればにはたつみ流るゝ涙とゝ
めかねつも

去年の春折りて見せつる梅の花今は手向となり
にけるかも

梓弓春も春とも思ほえず過にし子らかことを思
へは

教訓的な材料が何かありさうなものであるが今
日までには餘り發見されて居らない。私の調べた
所では次の二首がある。

人の身はならはしものそ子供らをよく教へてよ
ねきらひまして

人の身はならはしものそ殊更によく教へてよさ
きくしまして

同じやうな歌ではあるが、若しも科學的に分析
するならば、

1. 人は習慣が大切だから善良な習慣を作るやうに育てよ

2. 子供はよく慰勞してやれ

3. 子供は幸福になるやうに育てよ

といふやうな事にもなるであらう。良寛は子供の味方であつた。近ごろの兒童中心主義などから見てもおもしろい歌である。

以上甚だ粗雑ではあるが良寛の一生を通じて子供との關係を概観したのである。私は次に逸話に現はれた子供と良寛を見ようと思ふ。

○

良寛の逸話中には後から附け加へたやうな話が澤山にある。古の名僧知識の逸話を其のまゝ良寛に充てはめたのもあり、奇僧の奇を一層鮮かならしめん爲めに態と究飛な話を附け足したのもある。併し近頃國上村大字牧が花の解良淳二郎氏の所に傳はつて居た。『良寛禪師奇話』といふ權威ある逸話集が世に發表されたので良寛研究者には好

資料を得たわけなのである。此の書は當主淳二郎氏の先々先代三郎兵衛號を榮重と言はれた人の手記で半紙の野紙二三十枚ばかりのものである。榮重は良寛周圍の人として有名な寂問老の子で、文化七年正月八日生安政六年二月廿六日歿したのであるから、良寛がなくなつた。天保二年正月六日には丁度廿二歳の青年であつた。而して右の手記は榮重が老後の徒然に書殘されたものらしいので、直接良寛に接した人であるから、之に書いてあることは充分信を置くに足ると思ふのである。惜し哉子供に關するものは三つほかない。

△

師常に手毬をつき、はぢきをなし、若菜を摘み、里の子供と共に群れて遊ぶ。就中、師が地藏堂の驛を過ぐるや、其の地の兒童必ず相追隨して先づ『良寛さま一貫』と呼ぶ。師驚きて後ろにそりかへる。次に『良寛さま二貫』といふ。師一層多くそりかへる。かくの如くして二貫三貫

と順次其の數を増す毎に師のそり方ますますその度を加ふ。而して最後に後ろへ倒れんとするに至り、兒童之を見て喜び笑ふ。其の驛の長富取倉太幼年の頃余が家(解良家)に客たり。偶々師共に宿していふ。君が里の兒童癖甚だわろし。以後其のこゝをなさしめざれ。吾老いて甚だ難儀なりと。余その側にありて云ふ師何ぞ勞を忍びて其の如き戯れをなすの要あらむや。如かず自らなさるにはと。師答へて曰ふ。仕て來た事はやめられぬと。

こは一年人々の物をせり賣なるを師立ち寄り見、あまりに聲高く物の價を呼ぶに驚きて後ろへそり反りし事あり、爾後この戯れをなせしといふ。

△

師到る所に兒童と群をなして戯る。何れの里にや、師その地の兒童と遊ぶによく死者の態をなして路傍に臥すを常とす。兒童或は草を以て之

を掩ひ、木の葉を以て之を覆ひ、以て葬りの事に擬して笑ひ樂しむ、後に一狡兒あり、師が死者の體をなすや、指を以て師の鼻をつまむ。師も其の久しきに堪へずして自ら蘇生す。こは禪師自ら氣息を調べんが爲めになせし事ならんか。

此の外、國上地方に傳へられて居るもの、中で眞實らしい話は次のやうな事である。

△

良寛は好きなものが三つあつた。子供と、手毬とハチキと。

△

良寛はいくら權門豪族から禮を厚くして揮毫を願つても仲々書いて呉れなかつた。けれども子供が紙を持つて行つて頼むと「よし」で書いて呉れた。「樂重の手記には、師に書を求むれば手習をして手がよくなりて後書かんといふ云々とある」。

△

ある日良寛は子供とかくれんぼをして農家の薪小屋にかくれて、日暮になつても出なかつた。偶其家のお主婦さんが薪を取りて来て、良寛が薪の中に頭を埋めて居るのを見て「まあ良寛さまそんな處に何をして居なさる」といつて大笑をして。良寛は眞面目に「馬鹿！そんな大聲を出す」と鬼に見つけられるわ！』といつた。

△

あの日、良寛が鬼になつた。子供は相談して皆各々家へ歸つてしまつた。それとは知らない良寛は子供が其のうちに『よし』といふだらうと思つて待つてゐたが、何時まで待つても『よし』と言はない。たうとう日暮まで同じ所に茫然と立つて居た。

是等の逸話のどれ一つを見ても、良寛は子供に對して眞面目であつた、正直であつた。そして自己の全力を打ち込んで居る如く眞剣であつたこと

が見えるではないか。

○

良寛は今日の所謂兒童心理學者でもなければ教育學者でもない。近來世人が讚嘆措く能はざる詩歌にしても、書畫にしても、少しもまとまつた遺稿を有たない彼に何等かのプリンシプルを要求することは要求する者が間違つてゐるのである。私どもは良寛から何か或るものを得やうとするならば他の觀方に依らねばならぬ。

良寛は子供を愛した、そして子供は亦良寛を慕ふた。愛したのは何故であらうか、慕ふたのは何故であらうか、私どものは更に愛する者、慕ふ者の心を味はねばならぬ。

良寛は五合菴の一貧僧であつた。多くの人は飄逸無頓着な人であつたとも考へて居る。而かも彼が如く物質的に貧しい簡易な生活を營みながら精神的に高貴な生活を營んだ人間が世に在り得やうか。良寛は實に人間界を超越して居た。併しなが

ら所謂枯木死灰の野孤禪ではなかつた、彼が五體には尊い血も涙も流れて居た、廣大なる愛の光が輝いて居た。解良榮重は

師余が家に日を重ぬ。上下自ら和睦し、和氣家に充ち、歸り去ると雖も數日のうち人自ら和す、

師と語る事一たびすれば胸襟清きを覺ゆ云々

と言つて居る眞に是れ道義人を化するものではないか。人格人を動かすものではないか。頑是ない兒童も一たび彼に接しては永久に彼を慕はずには居られなかつたのである。

靈と肉と、自己と環境と、生と死と、幾多の人生問題に惡戰苦闘をつゞけて來た良寛は、飽くまで眞面目であつた、正直であつた。泣きたい時には泣き、笑ひたい時には笑ひ、踊りたい時には踊り、飲みたい時には飲み、歌ひたい時には歌つた。彼ほど偽らざる自己を淨裸々に赤灑々に告白した人間が世に在り得やうか。恐ららくは彼が一生七十五年間の不退轉の修養は、偽らざる自己を投げ

出し得る淳眞なる人間としての修養であつたであらう。かくて彼は天使の如き無邪氣なる子供を愛した。子供が泣く時、笑ふ時、踊る時、歌ふ時、彼は其處に淳眞なる人間の典型を眺めて微笑むのであつた。

私の知人の有つて居る良寛の戒語ともいふべきものに『心あさくおもはるるは——幼きものをたらかしてなぐさむ』とある。貞心尼の『蓮の露』に載つて居る戒語九十ヶ條の一つに『子どもをたらかす』と書いてある。偽り欺くことが如何に良寛の忌み嫌つたものであつたか思ひ知らるのである。

斯くの如く考へて見ると良寛といふ一衲僧の子供好きも一種の滑稽ではなくして嚴肅なる或る味ひを私どもに與へて居るのではないか。而かもこの味ひこそ、常に人の子に接して居る人々に取つて最も尊い或る物ではないかと思はれるのである。